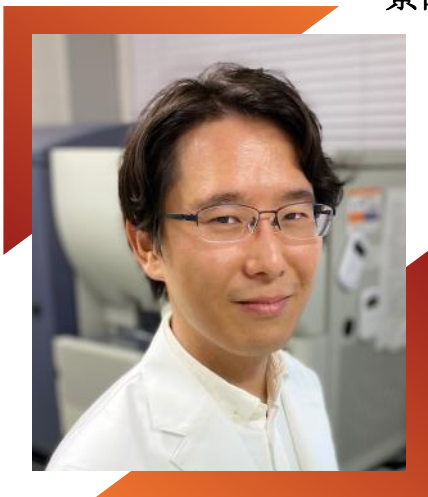


今月号は安井理先生から血液内科がご専門の景山裕紀先生にバトンが移りました。

## 第215回

## エイズってまだあるの？と言わないために

医師(ベイラー医科大学 博士研究員)  
景山裕紀



はじめまして、2022年4月に三重県からヒューストンに参りました景山裕紀と申します。日本では血液内科医として血液疾患、骨髄移植などの診療と研究に従事しておりましたが、血液診療の傍ら、HIV感染症、いわゆるエイズの診療も行っていました。先日、非医療従事者の友人に「エイズってまだあるの？」という素朴な質問をされ、医療従事者と一般社会との認識のギャップを思い知らされるという出来事がありました。今回は、皆様にとって名前は聞くけどよくわからない存在のエイズについて、基礎知識を再確認し正しい理解ができるよう、情報提供をさせていただきます。

1981年にアメリカで初めて報告されて以降、世界中を恐怖に陥れたエイズですが、40年以上経った現在も「まだあるの？」という質問に対する答えは、「まだまだある」というのが現状です。しかし医療の進歩はめざましく、一部の手遅れの例を除いては、昔のように発症したら死を待つのみというような恐ろしい病気ではなくなりました。一方で、現在の医療技術ではまだ完治させることができないのも事実です。

まず基礎知識として、HIVとエイズの違いをおさらいしておきましょう。HIVはヒト免疫不全ウイルスの略語で、免疫を司るリンパ球という白血球に感染し、免疫力を低下させます。エイズは後天性免疫不全症候群の略語で、HIV感染により免疫力が低下することによって発症する病気です。つまりHIVはエイズを引き起こすウイルスの名前、エイズは病気の名前です。新型コロナウイルスと、COVID-19の関係と同じですね。HIVに感染しても症状がすぐに出ることは少なく、数年はほとんど自覚症状がありません。その間にHIVが体内で増加し免疫力が低下し、その結果として健康な人なら防げるような感染症や悪性腫瘍などにかかりやすくなる、つまりエイズを発症します。

主な感染経路は性行為、血液感染、母子感染の3つですが、日本では性行為による感染が9割以上を占めています。日本の2021年の新規HIV感染者およびエイズ患者は1057人で、2013年をピークに少しずつ減少傾向となっています。約6割が男性の同性間性的接触によるもので、年齢では20歳代～40歳代に多い傾向があります。一方、世界では2019年の

新規感染者は170万人で、3800万人がHIVと共に暮らしているという状況です。特にアフリカ諸国などの発展途上国に多く、これらの地域では女性、妊婦の感染も多く、世界レベルでは今もなお公衆衛生上の大きな問題となっています。

さて、ここまでお読みいただいた読者の方々は、「私は性交渉の相手が特定のパートナー1人だけなので関係ない」と思われた方も多いと思いますし、実際に日本の感染状況を考えるとリスクなコミュニティーに属していない限り感染の可能性は低いと考えられます。しかし、自分は大丈夫でも、パートナー、自分の過去のパートナー、パートナーの過去の相手がみな適切な感染予防行動をとっていたと自信を持って言えるでしょうか。また同僚、親戚、友人がHIV感染者だと知った時、今までと同様の接し方ができるでしょうか。

特定のパートナーだけの性交渉であれば100パーセント安全かという、残念ながら答えはノーです。例えばいま交際しているパートナーは一人でも、どちらかの過去の相手がHIVに感染していてこれまでに適切な感染予防をおこなっていないような場合には、感染する可能性があります。また患者さんの中には、奥さまとお子さんの4人家族の男性で、最近インターネットで知り合った男性と関係を持つようになり感染した、というような方も少なからずいらっしゃいます。このような点から、性行為の際の適切な感染予防が重要となってきます。エイズの予防には、コンドームを正しく使った性行為が最も有効とされています。コンドームを正しく使わない性行為の経験が一度でもある場合は、HIV検査を受けることが推奨されます。HIV感染は他人事ではなく、いまだ身近な問題であるという認識が必要です。なおHIV検査は日本では保健所で無料かつ匿名で受けることができるので、少しでも心配がある場合は検査を受けることをお勧めします。アメリカではクリニックでの検査に加え、セルフテストキットも販売されています。

HIV感染症・エイズの治療は飛躍的に進歩しており、まだ完治はできないものの、早期に発見して適切な治療を継続すれば、感染していない人とはほぼ同等の寿命、社会生活を送ることができるようになりました。感染により死亡率が低くなった分、HIVと共に暮らしている人の数は増加しており、一般社会でHIV感染者に出会う確率は以前よりも高くなっています。そして、残念なことにHIV感染者に対する偏見、差別が、感染者が社会で生活しづらくなる原因の一つとなっています。HIVは体液内でしか生存できないウイルスであり、握手、軽いキス、せき、くしゃみ、汗、トイレの便座、お風呂、飲み物の回し飲みなどでは感染することはありません。また適切なHIV治療を受けて血液中のHIV量が検出限界未満に抑えられているHIV感染者からは、性行為によって他の人にHIVが感染することもありません。

エイズに対する正しい知識を持ち、しっかりと予防しましょう。また正しい知識を持つことで、HIV感染者に偏見を持つことなく、普段通り接することができるようになるはずです。

今回は放射線科がご専門、MDアンダーソンがんセンターで研究をされている南口貴世介先生です。南口先生とはヒューストンのアパートに1ヶ月違いで入居し、今ではすっかり飲み友達になりました。関西弁でいつもニコニコしている楽しい先生です。